



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第28回】

先祖の地を訪れた秋田藩の家臣たち

1 那珂・横手市が職員を派遣

茨城県水戸市から国道123号を東茨城郡城里町方面に向かう。同町那珂西の交差点を右折し県道356号（城里那珂線）に入る。那珂川に架かる「那珂西大橋」を渡ると那珂市戸。交差する県道102号（長沢水戸線）を龍昌院の塀を見つつ右折し、同102号を水戸方面に向かう。まもなく進行右に「戸村不動尊」のお堂がみえる。そこを右折し那珂川に向かって路地を進むと、戸村城（同県那珂市戸）跡に出る。

城跡に立つ案内板は「慶長7年（1602）、佐竹氏は秋田へ国替となり、戸村氏もこれに従って秋田へ移り、戸村城は廃城となった」と記し、そのうえで「秋田に移った戸村氏は義国が大坂冬の陣で徳川秀忠から感状を与えられる活躍」と、戸村氏中興の祖、7代義国を称える。さらに「9代義璉は寛文12年（1672）、横手城代となり、以後明治まで佐竹一族の重臣として栄えた」と述べている。

戸村氏が横手城（秋田県横手市）の城代となった縁で那珂市は平成16年（2004）10月、横手市と友好都市の締結をした。交流は観光・スポーツ分野にとどまらず平成28年（2016）4月から両市職員の相互派遣に発展。コロナ禍で中断後、那珂市の先崎光市長が横手市の高橋大市長に復活を働きかけ、令和6年（2024）4月から再開。現在、横手市から7代目となる派遣職員（期間1年）、沼倉望さん（27）が今年4月から那珂市政策企画課に在籍中。沼倉さんは「那珂市と横手市の繋がりが続いていくよう役割を果たしたい」と意気込む。

2 秋田藩で系図編纂の必要性高まる

久保田城（秋田県秋田市）を拠点に領内支配を整えた佐竹氏は、久保田藩（以下秋田藩と呼称）初代の義宣、2代の義隆、3代の義処と順調に代を重ねた。久保田の城下を始め一門、一族を領内要所に配置し、各地の武家町も整備された。家臣たちもそれぞれの落ち着き先で暮らし始めた。次に秋田藩が取

り組んだ一大事業が修史事業だった。

佐竹氏は、突然の国替言い渡して家臣ともども取るものも取り敢えず、秋田へやってきた。このため誕生したばかりの秋田藩は、常陸時代の記録を持っていなかった。そのため何としても歴代当主の事績を明らかにし、家臣の出自を確認する必要があった。秋田公文書館発行の『秋田藩の家臣団—系図の編纂と分限帳—』（秋田公文書館企画展図録・平成12年発行）はこの修史事業を「家臣団を把握する必要に迫られたのが真の目的であろう」との見方をしている。

秋田藩は家臣等の記録がない事態に手をこまねいていたわけではなかった。『秋田藩の家臣団』はこう振り返っている。「秋田藩の系図編纂の動きは寛文年間に家老・戸村義国を中心に始められた。系図・幕紋を偽作して華美に飾り立てたり、嫡庶を争ったりする者が多くなったためそれらを改める（こと）を目的とした」と。「しかし、戸村義国の死去とともに中断し、その当時の系図は残されなかった」と指摘する。

3 常陸に家臣を派遣、『金砂日記』作成

懸案事項だった系図編纂事業はこうした経緯を経て動き出した。時、あたかも徳川幕府が寛永20年（1643）、「寛永諸家系図伝」の系図編纂事業に着手した。秋田藩もこの動きに併せるかのように3代当主義処は元禄9年（1696）、「文書所」を設置し、文書改奉行に岡本元朝を任命した。岡本は家臣に系図、古文書、古記録、覚書の提出を命令するとともに翌元禄10年（1697）、家臣の大和田内記時胤と中村与助光得を調査のため常陸国に派遣した。

2人は元禄10年3月、江戸の佐竹藩邸を出て千住一松戸一取手と水戸街道を通して常陸国に入った。25日間にわたり、佐竹氏の旧領地を尋ね、同年4月、江戸藩邸に戻った。この調査記録を『金砂日記』という。そこには旧領内のうち寺社仏閣に関する記録や旧家臣の動静など様々な情報が載っている。

る。その中から2人が笠間の町屋に泊まった折に聞いた話を紹介する。秋田県公文書所蔵の『金砂日記』写本を底本に榎本實氏が発行人となって平成19年に発行した翻刻版より引用する。

「むかし、佐竹様百廿万石にて此国御座候時ハ私共承伝申ハ 上より下百姓町人迄御富貴に御座候よし申伝候（一部略）今廿万石にたらざる御知行にて秋田へ御国替被成候 其以後ハ百姓も町人も困窮に御座候（一部略）むかし佐竹様御座候時ハ所々に金山等御座候而所もにぎやかに御座候所に 御国替以来ハ亦秋田へ金山も飛申候て 此方にハ金山などと申ハ今ハ是なきよし」と。今より前の方が良かったと佐竹氏統治時代を懐かしがっている様子が伝わってくる。

4 戸村氏も旧領地を調査、『水戸旧臣記』作成

秋田藩は家臣から提出された文書類を「文書所」の岡本らが吟味・整理し、その中から藩が認めた文書を写し取り、原本を家臣に戻した。これらの写しを所蔵者別にまとめた文書が『秋田藩家蔵文書』である。『同家蔵文書』のうち「系図は享保12年（1727）5月に『諸氏系図』としてまとめられ、同時に義光家譜から義処家譜までの『佐竹家譜23篇も編纂された』（『秋田藩の家臣団』）。修史事業は藩として取り組んだ事業であるが、以後、横手・大館城代を務める戸村・小場氏が同様の動きをみせた。

元禄12年（1699）、戸村氏は菩提寺龍昌院の即応和尚と家臣の須々木平右衛門を戸村氏の居城があった戸村（那珂市戸）へ派遣、旧家臣から系図や古文書などの提出を求めた。それらを写してまとめた記録を『水戸旧臣記』という。当時の戸村家当主は「元禄13年（1700）、戸村家では義璉が隠居して義輔が32歳にして第2代の横手城代に就任する」（『横手市史通史編近世』＝平成22年発行）とあるので、初代城代義璉の時と考えられる。

那珂市町史編さん委員会が昭和56年（1981）に発行した『水戸旧臣記』は国替後、戸村に残った旧家臣の様子が書かれている。表題に「差上申書付之事」と書かれた文書には「義宣国替之後當村百姓二罷成、伊賀ハ相果申候、我等親父久右衛門と申者も百姓仕相果申候（以下略）」とある。戸村氏の家臣だった滝田氏が祖父伊賀の代に賜った給地（上国井村内）で百姓となり、父も百姓となって2人とも亡くなったと述べている。自らも今、親の跡を継ぎ百姓をしているとある。

5 佐竹西家も家臣を派遣、『常陸御用日記』作成

横手城代の戸村氏が旧領地、常陸国戸村を尋ねてから16年後の正徳5年（1715）、今度は大館城（秋田県大館市）の城代、佐竹西家（小場氏）が常陸時代に居城のあった小場（常陸大宮市小場）を中心に旧家臣や寺院を尋ねた。尋ねた家臣は前小屋民部と平山半左衛門である。小場氏初代の義躬の事跡調査が主要目的だったようである。小場氏は久保田藩2代当主義隆から明暦4年（1658）、佐竹姓を賜り、佐竹東・南・北家と並ぶ西家となった。

旧領地とはいえ水戸藩の藩領内での調査なのでかなり気を遣ったようだ。『大宮町史』（昭和52年発行）は「秋田より常州へ身（親）類之有り、江戸へ登るついでに立ち寄る」とか「上方に仏を詣でるついでに小場家の法名に不明の点があるので調べたい」など「入国は江戸、上方への通過途上に過ぎないことを強調している」と指摘する。2人は旧領地滞在中の大半を小場で過ごし、当主義村に「小場初代と確認された義躬の肖像掛物」（『大宮町史』）等を始め寺の証文や文書類を献上した。

旧家臣たちは先祖から受け継いだ給地で田畑を守り、百姓をしながら先祖の地に留まっていた。国替から約100年後、その様を宗家、戸村氏、小場氏の家臣たちは目の当たりにした。常陸に残留した旧家臣たちは、佐竹氏家臣だったことを示す系図や文書を大事に所蔵していた。その思いは国替から400年以上過ぎた今、友好都市として那珂・横手市、常陸大宮・大館市、仙北・常陸太田市、姉妹都市として秋田・常陸太田市があることで続いていると言えるだろう。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



秋田県横手市へ移った戸村氏が常陸時代に居城としていた戸村城跡＝那珂市戸